

2018 全教中四九プロ青年教職員学習交流集会 in 長崎

12月8日、9日に長崎市「矢太樓」で開催されました。これまで、6月、8月、9月、11月の計4回の準備会議を開催し、青年部役員を中心に準備を進めてきました。県内から10人、県外から25人の参加があり、「長崎高教組の青年部が復活した」ことを印象付けるような充実した集会となりました。

一部ではありますがご報告いたします。

今後ともご支援よろしくお願ひいたします。



○記念講演 山口 響さん 「『?』を生み出す教室・学校へ」

最初に記念講演として、活水高校や大学で「平和学」の講師を務めておられる山口響さんが「『?』を生み出す教室・学校へ」と題して、ワークショップ形式の講演を行いました。内容は、その後行われる3つの分科会や授業での実践を意識した2つのテーマで行われました。



前半は、「児童、生徒の『主体性』とは？」というテーマで講演、続いて授業の場面を想定して、「生徒がどのような場面な状態にあれば、『主体的・能動的』であるとみなすか。」ということグループで話し合いました。その後、グループ別の発表と講師によるまとめが行われました。なかなか答えの出ない問題を話し合うことが難しかったようです。

後半は、「『ラブ&ピース』を越える平和学習」というテーマで、3人の戦争に関する意見を読み、意見の違う人に対して、どう相手を納得させるか考える学習でした。「『いろいろな意見はあるけれどみんな仲良くすればいいじゃん』のような『ラブ&ピース』で物事が解決するならば苦労はいらない。」と話され、相手の立場に寄り添いながら説得することの大切さを学びました。

2つのテーマを通して、参加者はアクティブ・ラーニングの実践を体験することができました。最後に講師から、望むべき「主体性」とは、「学校外で実践できる」、「自ら問いを立てることができる能力」というまとめがありました。



以下参加者の感想です。

「実際に話し合う時間が設けられ、他県で校種も違う様々な先生方と意見を交換できてよかった。話し合い活動を行った際の先生方の反応もよく、山口先生の総括も納得できるものだった。」

「戦争について、それぞれがそれぞれの立場や事情を抱えている。考えを寄り添い説得することの難しさを感じました。」

「日本寄りの戦争に対する意識とは全く異なる見方の各国の意見に対してどのようにアプローチするかというグループワークが最も心に残りました。『平和』と簡単に言っても、自分が受けた被害だけを主張していても絶対に埒があかないのだと知りました。長崎の被害を伝えていくのは大切ですが、他県や他国の受けた被害についても知っていないと、平和というものは実現しないのだと思いました。」

「初対面の方々との討論は緊張しましたが、一つの資料の見方が人それぞれであることを実感しました。機会があれば、今回の平和学習の内容を勤務校で実践したいと思いました。」

「実際の授業に近い形式でとても分かりやすかったです。私たち教員でも難しく、答えにくいテーマも

あったので、高校生にはハードルが高いのではなかろうかとも思いました。しかし、『ラブ&ピース』的な平和教育からの脱却という目的は共感する部分も多く、授業の年間計画や単元など、平和学習の全体像を知りたいと感じました。」

「講演は全体を通じて生徒の『主体性』をはぐくむことについてご講演いただきました。教室は教師の権力行使の空間であり、その場でのアクティブ・ラーニングはいわば”やらせるアクティブ・ラーニング”ですが、それをやらせることに意味を持たせていくというお話に共感できました。」

分科会Ⅰ「平和学について考える」

分科会Ⅰでは講演者の山口響さんをオブザーバに迎えて「平和学について」考えました。参加者は校種も多様な11人でした。

最初に長崎工業の砂田先生より長崎工業の平和学習の取り組みについて紹介がありました。長崎工業では昨年より自校の被爆の状態について学んでいます。生徒の代表者たちがその被爆遺構を訪ねたり、被爆体験記では美術部が挿絵・読み上げを放送部が行うなどしていることが紹介されました。



その後は各県、各校での平和学習について紹介しました。長崎では当たり前にある8月9日の登校日ですが、他県ではないところがほとんどです。また、平和学習についても学校の設定時間としては無く、教師が修学旅行前後にまとめて行ったり、卒業後に偶然を装って生徒を集めて被爆遺構を訪ねる先生もおられて、地域や担当の先生により随分差があることがわかりました。ある県の先生は「ちょっと熱心になると教育委員会から目をつけられる」と言われ、長崎の先生方は

驚いていました。オブザーバの山口響さんからは「平和学習という長崎・広島・沖縄になりがちだが、そうではなく、「地元」の戦争の歴史に焦点をあてて考えたほうが良い」「また、「原爆」の一点だけで考えるのではなく、その周りを取り巻く「戦争（当時の風習・日本の加害状況も含め）」も教えた方が良い」と助言していただきました。また、さらに、「生徒は、核兵器（戦争・原爆）は「昔のこと・他県の話」となりがちであるが、それは間違っており、『今の話』という感覚を生徒に持たせるつもりで授業している。」と話されていました。

それらの話から「過去だけど過去じゃない、今の時代にも影響があることを教え、生徒が自身の未来をどうしていくか考えさせることが大切であるという感覚を持たせる授業は全国それぞれの地域ですることができるし、どの校種でもできる。」との意見がだされ、この分科会を終わりました。

参加者の感想「長崎工業高校での平和教育の実践例について拝聴しました。多くの学校で平和教育が形骸化し、ビデオを見せて感想を書かせるだけという形式が横行している中で、身近な地域から平和学習の教材を丹念に探すという取り組みをされているのは素晴らしいことだと思いました。質疑応答でも活発な意見交換がなされ、この領域に対する参加された先生方の関心の高さがうかがえました。」

分科会Ⅱ「自己肯定感の醸成のために～学びの共同体を取り入れた実践～」

分科会Ⅱは、平戸高校の片山先生実践例について説明があり、14名の参加者がありました。地域の特色をふまえた上で、学力にかなりの幅がある際の具体的な指導法の中で、「先読み授業」についての報

告がありました。生徒の予習を仮定せず、「理解できた、わかった」感を全員に達成してもらうことを目標の1つとし、授業改善も継続しているとのことでした。説明のあとは校種をこえて、質疑応答でも活発な意見交換がなされ、片山先生の授業における Youtube 活用への質問や小学校の先生からは、週一度「わかった」教室を通じて自己の課題に対する取り組みを認める指導の紹介が出されるなど盛り上がり、時間ギリギリまで続きました。



発表した片山先生からは、「日頃の授業実践を発表させてもらったのですが、特別支援を要する生徒への対応にいつも苦慮していました。今回参加いただいた多様な校種の先生方からの意見はすぐにでも取り組むことができるような内容が盛りだくさんでした。今回学んだことを校内で発信し、特別支援を要する生徒でも安心して学びを深められるような体制を作り上げていきたいと思います。」という報告

が届いています。

また、参加者からは、「学校に戻って実践してみたいと思うことばかりでした。教え合いにも一定の学習効果があると思うので、ルールを設定したうえで教えられるばかりにならないようにして、教え合うことも良いのではないかと感じました。例えば、教えられたら同じ内容で教え返せたら OK にするなどはいかがでしょうか。」という意見も寄せられました。

分科会Ⅲ 「作文・小論文指導に関する実践」

分科会Ⅲは、小中学生の作文指導、高校生の小論文指導の実践を持ち寄って、小学校から高校までの長期的な指導の視点から考える分科会となりました。参加者は7人でした。

最初に大村高校の渋谷先生より、小論文・作文の書き方について実践報告がありました。国語科の先生なので、毎年受験に向けての小論文指導があり苦勞されているとのことでした。苦手意識を持っている生徒が多いため、3年生になる前に取り組ませるようになったそうです。KP法（紙芝居プレゼンテーション）を活用し、黒板に貼付し可視化することで、小論文の材料を与え、生徒に書きやすい状況を作る方法も紹介されました。また、1人1人のクセを見つけ、入試前に個人ごとに作成した対策集を作成していることも紹介されました。



山口県の先生からは特別支援学校での作文指導の取り組みが紹介された。手作りの保護者向けの作文集を作られ、3人のクラスの生徒がもっと書きたいという仕組みづくりを行っておられました。また、極力赤ペンを使わず修正をしない（修正されるとやる気を失う）方法などが紹介されました。書くことを好きにさせることなど、どの校種でも活用できそうな内容が多く、学びが多い時間となりました。

担当した渋谷先生は、「小論文指導は、生徒のあら探しをしているようで何か嫌だなと感じていましたが、小学生ののびのびとした作文や感想文を読んで、自分の意見を相手に伝えることの喜びをもう一度思い出させて貰いました。生徒たちにもそのような視点をもって小論文を書かせるように指導していきたいです。」という感想を述べています。

一方、実践発表を行った山口の先生からは、「高校では、限られた時間の中で受験という目標に向かって小論文の書き方の指導をされていることがよくわかりました。高校生の実態を聞きながら、小学校でも書く経験をしっかり体験させないといけないと改めて思いました。」という感想が寄せられました。

また他の参加者からは、「ちょうど、職場で小論文指導をしている最中で、指導の実践例やポイントを学ぶことができてよかった。小学校の作文指導の実践でも、学ぶべきことが多くあり、自分の普段の教育活動を振り返る貴重な機会となった。」「渋谷先生の最後は、『人を幸せにできるか』の視点で書くという言葉に感動しました。」という感想も届いています。

オプションツアー 「長崎の龍馬像までの散策と龍馬と亀山社中の話」



分科会終了後、ホテル近くの龍馬像まで散策を行い、途中にある唐通事林家の墓、阿蘭陀通詞加福家の墓を見学、長崎が貿易で栄えた町であることを墓からも感じる散策でした。ガイドの組合員より長崎での龍馬の活躍が紹介され、龍馬像まで記念撮影、さらに風頭山からの夜景を堪能しました。

夕食交流会

夜の夕食交流会は、各県のお酒も持ち込まれ、大いに盛り上がり県外の先生方とも交流を深めることができました。

参加者の感想です。

「学校現場でも高齢化が進みつつあるなかで、同世代の先生方の話を聞いたり、悩みを話したりする機会はとても少なくなっています。貴重な機会を与えていただいたことに感謝すると同時に、元気な先生方に負けないように自校でも頑張っていこうと決意を新たにしました。とても話しやすい雰囲気でした。」

「交流会では各県の参加者と仲良く話ができるように、男女比も考えながら座席を割り当てました。その結果として、皆さんと楽しく交流を深めることができ、大いに盛り上がった交流会でした。2次会にも多くの方に参加していただき嬉しく思いました。」

「皆さんと仲良くなれて嬉しかったです。最初は、別の県の方と同じ席ということで、緊張すると思っていましたが、皆さんがあたたかかったので、新たな交流が広がって、とても嬉しかったです。」「交流会では多くの県の先生方とお話しでき、日ごろの悩みが軽くなったように思いました。」



2日目

フィールドワーク① 「原爆資料館、被爆遺構めぐり」

フィールドワーク①は鳴滝高校の烏山先生のガイドにより、原爆資料館、平和公園、浦上天主堂を訪問しました。多くの先生方が一度訪問したことがあるそうですが、説明を受けながら聞くと、「より理解が深まった。」との意見がありました。他県では平和教育はあまり活発な状況ではないとのことですが、参加された先生方からは「原爆の悲惨な状況を後世に伝えていかなければならない。」などの意見が出されていました。参加者は9人でした。

県内参加者の感想です。「長崎の原爆資料館に行ったのは、恥ずかしながら小学校の社会科見学以来でした。教員になって広島の資料館には行ったことがあったのですが、広島とはまた違う雰囲気でした。



ガイドの烏山先生のお陰で、個人だけではなかなか深めることができないような学びをいただき大変感謝しています。」「原爆資料館には何度か訪問しましたが、説明をしていただきながら回ると理解が深まりました。ガイドの資格にも興味があります。長崎人として他県の方に説明できるように私も学びたいと思いました。」

フィールドワーク② 「鎖国時代の町歩き」



フィールドワーク②は、長崎工業の今泉副委員長がガイドを担当し、長崎駅から「長崎」の名前となった「長い岬」の崖下を歩き、史跡「出島」、新地蔵跡（中華街）、唐人屋敷跡など、歴史の教科書に登場する鎖国時代の長崎を巡りました。参加者は22人でした。

県内参加者からは次のような感想が届いています。「ガイドのお陰で、長崎がどのように作られていったのかを辿る、とても興味深く、楽しいフィールドワークでした。地元にな

がら入ったことがなかった出島にも初めて入り、非常に多くのことを学ぶことができました。あっという間の2時間半でした。今度はじっくり回ってみようと思います。」「ランタンフェスティバルで毎年同じコースを見て回るが、今泉先生がガイドをしてくださったおかげで様々なことを学びながら歩くことができました。特に貿易に対する国内外の熱意には驚かされ、様々なものであふれた長崎の豊かさや多くの人を受け入れる県民性がうかがえた。また、県外参加者からは、「長崎の町の歴史を学べてとても充実でした。出島ではカピタン部屋の調度品あつめの苦労やプライベート空間は史料がないから間取りだけの再現など、史料に基づく復元の徹底ぶりに舌を巻きました。」「一度長崎に遊びに来たことがあり、出島も訪れたが、今回は詳しい解説がついていたので、何倍もおもしろかったです。生徒が食いつきそうな豆知識や話題が盛り込まれていてあっという間の2時間でした。」という感想をいただきました。

学習交流集会を終えて

青年部は昨年復活したばかりで、開催できるか随分心配しましたが、青年部皆さんの協力でとても充実した集会を開催することができました。役員からは、「昨年度青年部が復活したばかりで、とてもじゃないけど無理だろうと思っていましたが、青年部長を中心に、準備委員会を立ち上げ、各地区から青年部スタッフを募り、皆さんの協力のもと無事に成功することができました。終わってみると非常に楽しく、各県の先生方と交流や情報交換ができてとても良い学習交流会でした。」という満足した感想が届いています。また、県外の方からは、「丁寧におもてなししていただきとてもありがたかったです。一生懸命用意してくださったのだと感じました。行ってよかったです。みんな元気をもらって帰ることができました。ありがとうございました。」「長崎の皆さまの企画と運営が素晴らしかったです。大変お世話になりました。」という感謝の言葉も届いています。この会の運営を通して、長崎高教組青年部は大きな役割を果たしました。

最後に次の様な頼もしい感想を紹介します。「長崎県の地理的特性を考えるとこれだけの数が集まったことは長崎県の団結力を示せたと思います。青年部が活発に活動することで次世代につながると思うので、今後とも活動の幅を広げていきたいと思います。」今後青年教職員が今回の経験を活かし、活動をより活発なものにしていっていただければと思っています。

記録 渋谷 雪絵・淵上まどか・松竹 恒夫・中鋪 優
感想 参加者の皆さん
写真 今泉 宏
編集 寺田 杉・今泉 宏